

《公開講演会記録》

戦国の城の魅力

鹿兒島国際大学短期大学部名誉教授 三木靖

1 戦国という時代

先ずタイトルの「戦国」とはいつのことでしょうか。

戦国時代というと日本史辞典では、「16世紀頃、戦乱が続いた時代」のことで、室町幕府が衰微し、北条早雲らが台頭した15世紀末から、秀吉による統一の完成した1590年までの100年間程とするのが普通です（『角川日本史辞典』等）。もっとも学校の歴史教科書は、戦国時代として応仁文明の乱（1467～78年）から秀吉の統一（1590年）までを扱っています。これは戦国の成立のきっかけに注目しているためです。

私は応仁文明の乱に着目して戦国期を考えていくことは大切だと思っています。

ご存知のようにこの乱は、京都の町屋のなかに櫓（やぐら）が建てられ築城が進み、そこで合戦が展開したという、当時の上流社会を含む京都の人びとには極めてショッキングな事件ですし、歴史上の大事件です。

ところがこの京都を主戦場とする合戦は、全国各地で先行したり、同時に発生した合戦と結びついていたので、戦国期は、通説より早く「1454年には始まり、通説より遅く1615年に終焉を迎えた」と考えるのがいいのです。この時代区分では、中央政権の成立や解体が必ずしも時期区分の画期となるとは言えません。歴史を中央政権で見るとはなく、各地域の歴史や各種の歴史（例えば城の変遷）の積み重ねとみるからです。

2 国指定史跡となった城

本題の「城」について述べます。

現代の日本において「城」は、国家行政上は文部科学省管轄、文化庁所管の「文化財保護法」の対象になることで、国民の関心を呼び（報道され）、多くの人々に注目され、観光地になりますし、各都道府県や市町村も、文化財保護条例を制定し、都道府県指定史跡や市町村指定史跡としています。国際的には、ユネスコが管轄している世界遺産に認定されれば、国際的に関心が集中し、世界中の人々に注目されます。

そこで直近の城をめぐる国の史跡指定を見てみます。

今年1月24日「島添大里城（しましー





写真1 島添大里城

おおざとグスク・沖縄県南城市)」（写真1）が国指定史跡になりました。ここでいう指定とは、法的には官報（号外）に告示されることです。島添大里城は沖縄南部最大の二重城壁と大規模な正殿（せいでん、国王の祭儀場）と御庭（うな、中央広場、重臣ら総登城の参列場）の完備した格式高い城跡です。この城は島添大里按司（あじ、領主のこと）が14世紀に築城したのを、尚巴志（尚氏最初の王朝）が1406年に攻略し、三山統一の拠点としました。その後、巴志は1430年首里城を築き、そこに移っていきました。かくして当城は、尚氏の別邸と位置付けられることになりました。

当城に関する以上の告示の内容は、1990年以来連年、地元大里村教委が調

査し、整理してきた成果でした。私は初年度から、調査の指導を依頼されて、毎年この城に向いてきましたから、沖縄のグスクとしては16番目の国指定史跡の誕生に関わることになりました。同種の指定史跡が多ければ、それだけ指定理由は該当する城が独自の価値を持つことを訴えるものでなければならぬことになるわけで、島添大里城がそれをクリアできたことは感無量です。

3 世界遺産としての琉球の「グスク」

さて琉球（沖縄）の城は「グスク」といい、「百曲（ひやくまがり）積み上げた」城壁に囲まれているのが特徴です。城壁はゆるやかな曲線を描き、城の主な範囲を、高さ数m以上、幅1m以上の珊瑚の城壁で囲んでいます。このように珊瑚を石材として規格性を持たせ、多量に使うことは、国内ではグスク以外では見られません。このような城壁となっている石垣は、稀少であるばかりでなく、見た目も鮮やかで、グスクの最大のポイントになっています。

ちなみに世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺跡群」には5城が含まれ、遺跡群の中核施設になっています。その5

城とは、今帰仁（なきじん）城（沖縄県国頭郡今帰仁村）、座喜味（ざきみ）城（中頭郡読谷村）、勝連（かつれん）城（うるま市）、中（なか）城（中頭郡中城村）と首里（しゅり）城（那覇市）です。5城の城壁はいずれも調査を経て復元されており、これがグスクの芸術性、景観性を高めています。

このうちの首里城は1994年に城壁に加えて久慶門・奉神門・正殿（鎖之間）・北殿・南殿・番所・御庭等が復元され、正殿の朱色の外観は城壁とマッチして壮観です。同城は1430年に尚巴志が築き（1406年に第一尚氏となった）、1470年に尚円（第二尚氏）が継ぎ、尚真王（1465年生—1526年没）のときに最盛期を迎えました。

しかし、現在復元されている城壁や諸施設は、じつは全て幕末維新期の資料に基づいたもので、首里城の最盛期の様子を復元したものではありません。

復元された首里城の景観は、戦国期どころか、その80年後に島津藩の付庸国となった琉球王朝の王府となり、更に250年程度経過した時期のものなのです。戦国期の城を論じる場合には、今の首里城を戦国期の首里城と同一視することはできませんが、このような事実を念頭に首



写真2 首里城

里城を観察し鑑賞することは、世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺跡群」の本来の姿に迫るのに役立ちます。(写真2)

この世界遺産に登録されたグスク5城を始め、沖縄の国指定史跡となっているグスクは16城もあり、いずれも地元の人々の信仰の対象地が含まれていて、グスク全域が聖地的であるとされ、整備が急速に進み、沖縄の歴史を象徴する存在として、観光面でも核となっています。

4 世界遺産になった日本の城

次に、日本の世界遺産と城との関係を見ておきましょう。

日本の世界遺産は今、16あるのですが、そこには城が、何と12城も含まれています。すでに触れた沖縄のグスク5城以外に7城あるわけで、そのうち6城が石見銀山関係です。矢滝城・矢筈城・石見城・山吹城・鶴丸城・櫛山城(以上島根県大田市)がそれですが、沖縄のグスクのように整備されておらず、観光地にもなっていません。

最後にもう1城、それは単独で登録されている播磨国姫路城(兵庫県姫路市・写真3)です。今まで述べてきた11城と異なっていて、江戸幕府によって許可された、天守閣や櫓という高層建築物のある近世の城です。近世の城は、多くの人に親しまれた「天守閣・高石垣・水濠」を主要な要素とし、大名が領国を統治する拠点にした城で、いわゆる「お城」としてイメージされているものです。

日本の世界遺産12城中、この姫路城以外の11城は戦国期の城で、現況は城跡です。このように日本の城の世界遺産の実に91%は戦国期の城なのです。更に日本

の城全体でみると、日本中の城の総数は約2・5万城(『日本城郭大系』1981年最終巻の掲載城数による最小の城数)もありますが、江戸幕府が一国一城令で許可した城は最大でも200城程度です。要するに「天守閣・高石垣・水濠」を主要な要素とする姫路城のような城は、日本中の城のうちの0・08%に過ぎず、城の99・92%は戦国期の城なのです。ですから、本稿は日本の城の本流である、戦国期の城について述べることにします。



写真3 姫路城

5 土で築いた城

まず戦国期の城の大部分に共通するのは、地形の高低差を使った「搔揚（かきあげ）城」だということです。搔揚という、天ぷらを連想するかもしれませんが、搔揚城とは土を搔き揚げて築いた城のことです。

戦国期には政治的課題の決着は合戦でつけるのが当然と考えられていましたし、中央政権が弱体化していて、地域の治安は地域で維持せざるをえなかったため、地主（領主）や住民（村）は合戦や外敵の来襲に備え、周囲より高い場所を選び、その地域内で処理できる土量を使って城を築いたのです。

周囲より高い場所を選ぶといっても合戦や外敵の来襲に備えるためですから、登山の対象になるような高山ではありません。集落に近い場所を選びました。今流行の言葉でいうと里山に築いたのです。もっとも里山という言葉は最近のもので、史料には「前山（前岳）」として登場しています。その前山の頂上とその周囲に一定規模の建物が建てられる面積の平坦地を作ろうとする際、斜面の高い部分を削って斜面の低い部分に削りとった

土を盛りあげるのが効率的です。

平坦地の周辺や周辺の崖には、防衛のため、平坦地を保持するため、そして近づくものへの威圧感を考慮して、石や岩を配置することを考えますが、実際には石や岩はなかなか手に入れにくく、土を使わざるをえませんでした。築城は元来が高低差という自然の地形を利用するものでしたが、それに加えて建物を建てる平坦地について、更に高低差を強調しようとしたのです。この平坦地作りの大部分は土の移動作業とならざるを得ませんでした。当時この作業を「搔き揚げ」と表現しました。

その事例として竹田城（兵庫県朝来市）を紹介します。この城は円山川に面した、標高354mの古城山の尾根に築かれ、頂上部は伐採されていて、円山川付近から中央の本丸を含め南千畳―北千畳のほぼ全容を見ることが出来ます。当然、城の内部からも周囲の眺望が利き、当時の合戦に備えた城の目的に合致していて学術的にも意味があります。

この城は1441年太田垣氏が初築、1577年秀長が改修し今のような総石壁になりました。これは秀吉流の城壁で近世の姿でして、それ以前は土造りでした。

なお、山の麓から2006年以降の発掘調査で居館（平城）跡が明らかになりました。このように戦国期の城には山城と平城が併存したケースが少なくありません。山上だけでなく中腹も麓も使う城が多かったのです。

6 城の要素

戦国期の城は、すでに述べた平坦部分とその周辺の斜面、更に麓の平城を含む構造が一般的でした。その平坦地で周囲を防衛されたものを曲輪（くるわ）と呼んでいました。曲輪は周囲を切岸（きりぎし）と空堀（空堀）で囲み、平坦地の周囲は土塁（どるい）で守られていました。以下空堀、土塁、切岸、曲輪その他と、戦国期の城を構成要素別にみていきます。

「1」空堀

空堀とは曲輪を保全し、進路を遮断するものをはじめ、横堀（よこぼり）、畝堀（うねぼり）・堀障子（ほりしょうじ）、縦堀（たてぼり）・畝状縦堀群（うねじょうたてぼりぐん）、堀切（ほりきり）など多彩でした。

空堀の断面をみると概して葉研堀（やげんぼり、V字）が多いのですが、底が



写真4 入来清色城

平らになっている箱堀（はこぼり）もありました。横堀は平坦地を掘り窪めたもので、曲輪の周囲や城全体の周囲に作り、各曲輪を守るものです。そのなかには堀の内部での相手方の行動を制約するため、一定間隔で高い部分と低い部分を作ることでありました。それを畝堀といいます。また堀の内部に縦横に高い部分を作ることで障子の棧のようにみえるものもありました。それを堀障子といいます。

それに対し堅堀は高いところから低いところに向かう堀を作るものです。それは普通は斜面（崖）を掘り窪めて作ります。その堅堀を連続して作ったのが畝状堅堀群で、斜面を横に移動する相手方の動きを封じようとしたものです。尾根筋等に深く掘り窪めた横堀は堀切といいました。これは城域のある尾根筋の、より

高い場所に尾根筋を堀切る位深く掘ったもので、城域への高所からの侵攻を防ぐものでした。

写真4でご紹介したのは薩摩国清色城（鹿児島県薩摩川内市）の空堀（横堀）です。この城は、1247年に入来院地頭に任命された御家人渋谷光重（相模国渋谷庄が本領）の子孫が鎌倉末期に築き、光重の5男定心を祖とする入来院氏が本城としました。

入来川左岸、標高98mを最高地点とする南北600m、東西750mの広大な城域があり、シラス台地北東端を主に16の曲輪で構成され、中心となる「本丸」曲輪は空堀で周囲の曲輪と隔絶されてきました。そのうち本丸北側の空堀は幅3m程度、深さは20m余で長さ150mの部分を経核にして東西に繋がっています。本丸の虎口付近は深さ8m程ですが、50m東で一気に10m位下りますので深さが20m余になります。

空堀の東側は狭く、薄暗い空間で圧迫される感じの景観になっています。今は崖面の崩壊が危険ですが、かつては上から石を投下される危険が大きく、陰呑な空堀だったと想像させます。城の東側沿いに、伝統的建造物群に指定されている入来麓が残っていて、地域全体が戦国期

前後の歴史景観を残しています。

〔2〕土塁

土塁とは曲輪の周囲に築いた土塀状の施設のこと、周囲からの攻撃に耐え、城内勢が、相手と戦えるように築かれました。攻撃に備えるために厚く高い土塁が造られることもありましたが、西日本では海岸地帯を中心に台風等の強風から建物を守ることも考慮した巨大な土塁が造られたこともありましたが、多くは空堀等で出た土を盛りあげましたが、平坦地を造る際に周囲を残した、掘り残しの土塁もありました。

土塁は四周全体にわたる場合もありましたが、地形や想定される攻撃に応じて特定方向に対し築かれる場合もありました。土塁は、周囲との連絡や、周囲を監視するために一部に高く、広い部分を造ることがありました。これは櫓を築くための土台となる場所という意味で櫓台と呼ばれました。また土塁と同じ役割ですが、城や城下の周囲に防衛のために築いたものは土居（どい）と呼ばれました。戦国期に秀吉が京都の周囲に築いた土居は、そのまま御土居（おどい）と呼ばれて今も一部が残っています。しかし近世以降、土塁の大半は不要となりました、

放置されて高さが失われたり、消滅したりしたものも少なくありません。

その例として越前国玄蕃尾城（げんばおじょう・福井県敦賀市・滋賀県余呉町）を紹介しましょう。この城は1583年の賤ヶ岳の合戦の際、秀吉と戦った柴田勝家が築いた城で、勝家の家臣、佐久間盛政が城主だったので、彼の通称、玄蕃允（げんばのじょう）から名前がつけられました。福井県と滋賀県の境の柳ヶ瀬山の山上に築かれ、北国街道を見下ろす位置にあり、残存状況はよいと言えます。30mと35mの方形本丸曲輪を囲む土塁をはじめ、その周囲の曲輪の土塁もよく残っています。「賤ヶ岳古戦場跡」からは10km以上も北に離れています、一見の価値があります。

〔3〕切岸

切岸とは曲輪の周囲の崖を垂直に近くすることで、曲輪を守る側からは、曲輪の直下に来た相手と真上から対峙することで極めて優位になります。城攻めをする側にはとっては、城内で障害物を排除しながら、曲輪に頼る相手の目の前に接近できても、最後の難関となって、身体窮まることになりかねません。

切岸を作るのは危険な作業でしたが、

それだけ効果もあり、特に掻揚城では多用されています。とは言え切岸を自然の崖と区別するのは容易ではありません。地形は自然現象で切岸状になることもあります。そこで、切岸については、切岸を作ったという史料があるとか、周辺の地形との対比と地形の仔細な観察で判定しますが、切岸を作る際に不要な部分は削除され、廃棄されてしまうので確認は大変難しいと言わざるを得ません。切岸と判定することは難しいことを考慮して、なおかつ切岸か否かの判定をしなければならぬ場合が少なくありません。

〔4〕曲輪

曲輪とは城内にあって、周囲を防衛された平坦面のことで、すでに何回も触れたように城の最も重要な構成要素で、本格的な城では必ず作られるものです。曲輪には、城の主要な建物、施設等が建てられます。城主や城兵の生活の場は、平城を使っていた時期がありましたが、戦国期の有力領主は、それらも全部山城に移しました。当然、宗教と密接な生活をしてきた領主は寺社も曲輪に建立しました。戦国期の領主は、曲輪を合戦のために直接使っただけでなく、統治の機能も、経営の機能も、精神的、文化的機能

もこの曲輪に移していきました。

曲輪のなかで一番重視されるものは一郭（いちのくるわ）・主郭・内郭（うちぐるわ・ないじょう）、本丸・詰ノ丸、更には内城（うちじょう）・根城（ねじょう）・実城（みじょう）・詰城（つめのじょう）等多彩な呼称があり、それぞれ成立の事情とかかわりがあります。

さて城内の平坦面は、全部が曲輪とは呼ばれませんでした。最初に述べたように防衛された平坦面だけを曲輪と呼びます。防衛されていないものは単に平坦面と言い曲輪と区別するのが、戦国期の城の真相に迫る鍵となります。その防衛性は平坦面の周囲を切岸にすること、厳しい斜面や崖にすること、または曲輪の周囲に空堀を掘り、平坦地の周辺に土塁や柵等を造ること、あるいは逆茂木等で周囲や出入口を封鎖することができる土地とすること、相手方が簡単には入れないようにしつつ、守備側は必要なら直ぐに出られるように出入口を桁型で構えること等で高めることができました。こうなったのが曲輪です。

しばしば平坦面を一律に曲輪と表現することがありますが、曲輪は合戦時に備えるという戦国時代に必要とされる役割を果たさないものは含みません。合戦へ

の備えがないものは平坦地と表現するのがいいのです。

因みに曲輪は防衛された平坦地のことです。理論上は円状にするのが効率的です。そのうえ実際上も角のある境界より、丸みを帯びた境界が防衛上役立つため、「曲った輪」の字を当てたのです。

曲輪ではあっても独立していないものが沢山ありました。それは、主要な曲輪の脇にあって、主要な曲輪を擁護したり補助したりするのが使命でした。脇曲輪と表現されることもありましたが、帯状になったものは帯曲輪（おびぐるわ）と言ひ、主となる曲輪から、少し下段の位置にあるものは腰曲輪（こしぐるわ）と言ひ、主となる曲輪に繋がりが強いものは添曲輪（そえぐるわ、副曲輪とも書きます）と言ひ、本体から離れたものを出曲輪（でぐるわ）と言ひました。

その例としては陸奥国根城（青森県八戸市）の曲輪があります。1234年、甲斐から陸奥に移った南部師行が太平洋に注ぐ馬淵川に沿う緩傾斜の河岸段丘の端に築いた国主の本城で、代々南部氏の本城でしたが、秀吉に従った直衆の時代に「廃城令」により破壊されました。

1970年代末からの発掘調査で柱穴2万、礎石建物5棟、墓9基など多くの

遺構が検出され、1994年に史跡公園として本格的に復元されました。中央にL字型の主殿、常御殿、工房、鍛冶工房、納屋、厩、四阿（あずまや）、堀、塀門など、戦国期直後の東日本の本丸曲輪の全容を見ることが出来ます。

詳細な調査による内容の濃い復元で、戦国期の曲輪を考える上での最も重要な城跡になっています。

[5] その他

城の出入口は正面を大手、裏門を搦手と言ひ、曲輪の出入口を虎口・小口（こぐち）と言ひます。小口は曲輪の防衛の



城の全体図

ため狭い方がいいと強調したものです。出入口は大変重視されていて、出入口の前面に馬出（うまだし）を設けたり、通路に柵形（ますがた）を設けたり門、城戸に工夫を凝らしたりしました。また抜け穴、土橋、城道、犬走等にも独創性を発揮するものがありました。城造りは城下、城下町と一体的だったこともこの時期の特性でした。

以上の要素、要件を活かしつつ城造りをすることを「縄張り」と言ひました。現在、縄張りというところ、裏社会の利権争いを思い浮かべるのが普通でしょうが、戦国期には縄張りとは城造りの正業のことを指して言ひました。

その成果が縄張り図で、城の平面図に相当します。この縄張り図をもとに土木工事することを、「普請（ふしん）」と言ひ、建造物建設を「作事（さじ）」と言ひ、築城の基本部分でした。

宗教性が顕著だった戦国期の築城は、呪い、占いに依拠するところが多々ありました。また城の立地については安全性、交通の便、周囲の政治、財政、城主の関心等が大きく影響しました。当時広くみられた合戦の場合には、城は兵員兵糧基地、包囲の対象、援軍を呼び込む戦術の

舞台などになったと言えます。

城の全体像については単郭、複郭、連郭等の区分があり、これは曲輪の数や配置に注目した区分ですが、現在ではむしろ城の機能に注目し、本城と支城、付城・向城（攻撃用の城）、境目の城（領国の外延に位置する城）、繋ぎの城・伝えの城（連絡用の城）とするのがいいと思われます。

ここ迄に触れてきた要素の事例をいくつか紹介しておきましょう。

まず上野国平井城（群馬県藤岡市）は関東管領の本拠城で、東日本でもっとも重要な政治拠点でしたが、集落とほぼ同じ高さに曲輪、土塁、内堀があります。

近江国小谷城（滋賀県東浅井郡湖北町）は戦国の歴史の舞台となったので有名ですが、尾根上に階段状に築かれた曲輪が目立っています。1523年、浅井亮政が初築し、1573年、信長勢の秀吉に攻略されました。信長の妹、市の娘「江」が誕生した城です。戦国期の著名人の多くは、このような本格的な山城で生まれています。

三河国長篠城（愛知県新城市）も合戦の舞台となりました。1575年、家康方の奥平氏500人が長篠城に籠城し、武田勝頼は1万5千で長篠城を包围しまし

た。その勝頼は包围が長引くなか、この城を救援に来た（後詰めの）信長、家康勢と、設楽原で対決する決断をしました。この合戦は、戦いの場となった地名ではなく、合戦の起点となった長篠を冠した「長篠合戦」と呼ばれています。合戦が城を起点としたことを反映しています。

越後国春日山城（新潟県上越市）は典型的な本城です。この城は1346年頃以降に築城されたのですが、主体者是不明です。戦国期に越後守護代の長尾為景と、その子景虎（後の上杉謙信）、その子景勝が上杉氏の本城として整備しました。特に謙信は、荒川左岸の丘陵、通称春日山の頂上、標高182mを最高地点に東西2km、南北1・2km程の城域に天守台、本丸、二の丸、三の丸、柿崎郭、山里郭、井戸郭、直江郭、井戸郭、景勝屋敷、米蔵、毘沙門堂、林泉寺などの2百を超える曲輪をはじめ平坦地、空堀、土塁、櫓台、見張台等膨大な施設を設け、周辺の尾根上に砦、番所を築きました。その自然の起伏を活かした、一山全体を要塞化した山城は全国でも最も壮大なものです。

1935年に国指定史跡となり、長期の調査を経て、1996年に城域の北東端になる楼門地区を春日山城史跡広場とする整備復元事業が完成し、山麓をめぐる

総構である監物堀の堀と土塁の一部と番小屋が姿を見せました。本丸曲輪等は古城のままですが復元施設と「春日山城ものがたり館」の建設、「史跡のまちづくりの拠点」として広域散策路の設定、案内ボランティアの育成が進み、戦国期の本城が体感できるようになっています。

最後に近江国安土城（滋賀県近江八幡市）を「戦国に幕を降ろそうとした城」として紹介します。この城は1576年に織田信長が琵琶湖畔の標高198mを最高所とする安土山に、近世の城を強調するように金や朱等に彩られた地上6階（地下1階）の豪壮な天主閣を建て、総石垣を巡らせ、さらに麓の規格的な城下町などで、「天下布武」を象徴しました。

幅6m程の大手石段は直線で180m登り、天主に向かいます。その両側には家臣達の屋敷が作られていて、戦国期の城の常識を拒否するごとく、時代を先取りした縄張りでした。建物は1579年には完成しましたが、1582年に本能寺で信長が没した直後に焼失して廃城になってしまいました。1926年国指定史跡、1952年国指定特別史跡、1989年「2008年には「特別史跡安土城跡調査整備事業」で本格的な調査が行われ、復元整備が進みました。

7 戦国期の古城

戦国期は歴史上、城が最もさかんに造られ、使われました。今、全国に2・5万程の城跡があり、そのうち本城が3千城、国指定史跡が317城です。これら城は合戦を念頭にした、地域の自然と環境にに応じて築かれたものでした。当時の自然と環境の大半は、緑の樹木と草に覆われていましたので、城の斜面や崖も樹木と草に覆われて緑でした。

そのなかで本城の曲輪とそこに建てられた施設は見通しの確保、侵入者の捕捉のため地肌をみせていてそれが城の存在を周囲に主張しているかの如くにみえたと思います。砦や付城のように合戦に積極的にかかわる城は本城以上に個性を主張していたことでしょう。

それに対して城のなかで数の多かった小規模な、地域的な（集落の）住民の安全の確保を目指した城は、ほぼすべてが緑のなかに溶け込んでいました。住民の安全の確保はその存在そのものを隠すことが効果的だったからです。地域に絞って城をみた場合はこのように緑の樹木と草に覆われた城が主流でした。従って城は地域の自然と環境に応じて築かれたと

表現していると思います。そして戦国期の城には、本城を含めて地域の住民が大手を振って出入していましたので、地域に溶け込む側面が強くイメージされていたのです。

戦国期の城も地形を改変し造成する側面がありましたし、屋敷や耕地を睥睨する事態もありました。しかし本城は地域社会では住民が自前で作った最大級の構築物という性格が強く、地域の社会と政治、生産や家族生活、文化、宗教の舞台にもなっていました。

ところが戦国時代が徳川時代へ移りますと合戦が否定され、自前で城を築くことが許されなくなりました。平和志向の社会が出現したのです。城の位置付けは激変します。合戦で城主が敗れた城や武家諸法度で廃止された城は、住民にも見捨てられ放置されて、戦国期の全城が20年程で城跡となり、俳聖芭蕉はそのひとつ陸奥国高館城の跡に佇んで「夏草やつわものどもが夢のあと」と読み、共感を誘いました。今、夢の跡は草ならぬ樹木に覆われたものが大半です。その他、田畑となり人家となり、大規模団地に造成されて跡形もないものもあります。でも一方で法律により文化財として救済され調査され、更には復元蘇生される城が

出てきました。この幸運はほんの一部の城にしか及んでいませんが、今のところ拡大の方向にあります。

今では想像するしかない、合戦が政治的課題解決の王道であった中世戦国期の城は、既述の通り全国各地に結構残っています。消滅してしまった不幸な古城を追憶しながら、幸運にも蘇生の過程にある古城を訪問して、日本の各地に自前で城を築いた住民がいたこと、城が地域住民の誇りだったことに思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

最後にひとこと。拙稿「日本の山城の基礎知識」（3月刊の『歴史研究』No.599掲載）もご覧になってください。

（2月24日・公開フォーラム）

講師略歴（みき やすし）

- 1937年 東京都生まれ
- 1965年 早稲田大学大学院文学研究科国史専修修了
- 1971年 鹿児島短期大学教授
- 1982～2001年 同大学長
- 現在 鹿児島県文化財保護審議会長
- 主要著書 『薩摩島津氏』『島津義弘のすべて』『甦る日向国都於郡城』『クロニク戦国全史』など